

原田孝司先生を偲んで



【略歴】

原田 孝司 (はらだ たかし)
昭和 19 年 5 月 25 日生
(熊本県天草市)

昭和 46 年 3 月
長崎大学医学部卒業
昭和 48 年 6 月
長崎大学医学部第二内科医員
昭和 53 年 4 月
長崎大学医学部第二内科助手・
昭和 59 年 9 月
長崎大学医学部第二内科講師
昭和 61 年 11 月
英国ロンドン大学 Guy's Hospital
留学 (Professor J Stewart Cameron,
D Gwyn Williams)
昭和 63 年 1 月
長崎大学医学部第二内科講師
平成 5 年 4 月
長崎大学医学部附属病院腎疾患治
療部助教授
平成 16 年 4 月
長崎大学医学部・歯学部附属病院
血液浄化療法部助教授
平成 19 年 4 月
同 准教授
平成 20 年 1 月
桜町病院院長
平成 23 年 7 月
長崎腎病院院長
令和元年 4 月
長崎腎病院名誉院長
平成 11 年 5 月-令和 4 年 1 月
日本透析医学会誌編集委員会委員

原田孝司先生は、30 年以上勤務されていた長崎大学病院を 2007 年に退職され、その後は長崎腎病院の前身である桜町病院の院長就任以来、15 年の永きにわたって長崎県の地域医療に貢献されました。昨年 (2022 年) 2 月に癌の診断を受けた後も外来診療は続けておられ、患者さんにはご自分の病状と予後を告知し、後任の医師たちに申し送りをしておられました。外来診療がままたぬ病状になった夏以降も、2 週に 1 回、午後 1 時間を割り、スライドを使って、職員に先生の過去の業績やロンドン留学時代の楽しいお話をして下さいました。いよいよ身体が動かなくなった 2022 年の 9 月 27 日に当院に入院され、療養を続けておられましたが、2023 年 1 月 10 日の朝、ご家族や当院スタッフに見守られながら静かに人生を終えられました。

原田先生は腎・透析領域で優れた業績を残されており、腎病理や感染症、また地域の特異な疾患 (離島の壱岐のカドミウム腎症は原田先生のライフワークでした) についても熱心に研究されていました。近年では、終末期医療について精力的に活動され、透析の中止や非導入、また高齢者の透析や ACP についても多くの仕事をされました。つまり、原田先生は腎炎・腎症の初期から治療・腎代替療法・透析患者の終末期まで、腎疾患のすべての流れに関わってきた臨床腎臓内科医でした。カテーテル挿入などの手技も抜群であり、ご病気になる直前まで若い医師も舌を巻く腕前でした。

原田先生の生きがいはもちろん仕事、診療なのですが、学生教育・卒後教育にも熱心で、50 歳以上年下の医学生や研修医と頻りに飲み会に参加され、ご存じの方々には想像がつくと思いますが、大変楽しいお酒でした。また、高校時代にはインターハイ出場のテニス選手で、スポーツや旅行 (学会出張など) も大好きでした。

原田先生は毎週末になると、長崎から東京や大阪の研究会や会議に出張され、日帰りですたつの都市を往復することもしばしばでした。周りは、「先生、行く必要あるんですか?」とお聞きするのですが、いつも先生は「僕が行かんと迷惑かけるんよ」と真剣でした。国内外の出張の際には当然飛行機を使われますが、計算しますと、原田先生の 50 年以上の医者の中で、合計 1 年近くを空中で過ごされていたこととなります。

原田先生は私たちに、医学・医療の知識をたくさん教えて下さいました。それは現在とても役に立っています。

原田先生は私たちに、医師としての生き方を、ひとつだけ教えて下さいました。それはあまりに遠い目標で、一生をかけても到達できそうにありません。その生き方とは「いかなる時も患者に対して誠実であること」です。

ご家族を愛し、患者さんたちを愛しながら 78 歳という若さで人生を終えられましたが、何歳になっても好奇心と冒険心を常に忘れず、新しい事へのチャレンジをためらわない原田先生の姿は、私たちの心にいつまでも焼き付いています。一緒になって語り、悩み、喜び合える先生がもういないと思うと、寂しくてたまりません。

最後に改めて、原田孝司先生のこれまでの長きにわたる私たちへの温かいご指導に、心より感謝しながら追悼の意を表します。

(長崎腎病院理事長 船越 哲)